

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-139	16-130	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳）		
Consumption of Wine with Meals and Subjective Well-being: A Finnish Population-Based Study. 食事中のワイン摂取と主観的健康状態：フィンランド住民集団研究		
執筆者		
Oksanen A, Kokkonen H.		
掲載誌		
Alcohol Alcohol. 2016 Nov;51(6):716-722. Epub 2016 Mar 25.		
キーワード		PMID
フィンランド、食事中、ワイン、ビール、健康、自己効力感		27015691
要 旨		
目的： 一般地域住民において、食事中のワイン飲酒習慣が、主観的健康状態や危険な飲酒と関連するかを検討した。		
方法： フィンランドの 18-69 歳の無作為抽出集団 2,591 人（'Finnish Drinking Habits Survey 2008'（回答率 74%））を対象に、自己効力感、主観的健康状態、心的苦痛、制御不能な飲酒、飲酒にまつわる負の行動、危険な飲酒、飲酒量等につき質問を行った。禁酒者は除き、週一回以上の食事中のワイン飲酒習慣のある者に対する社会経済的要因のオッズ比と、週 1 回以上食事中にワインを飲酒する者の主観的健康状態や危険な飲酒に対するオッズ比を算出した。社会要因、喫煙、慢性疾患を調整した。		
結果： 集団の約 12%が週 1 回以上食事時にワインを飲酒していた。この習慣はヘルシンキ周辺のいわゆる都市部で多く、社会経済的要因の高さと関連していた。食事中のワイン飲酒習慣のある人は、飲酒習慣のない人と比較して主観的健康状態や自己効力感が高く、心的苦痛は低い傾向にあった。食事中ワイン飲酒者の 32.8%は、ワインに加えてビールも飲酒する習慣があり、内男性が約 3/4 を占めた。食事中にワインを摂取していない人と比較すると、両者を食事中に飲酒する人では危険な飲酒のエピソードが多かったが、ワインのみではこのエピソードは少なかった。運動や食習慣等の交絡因子が関与する可能性は残った。		
結論： 食事中のワインの飲酒習慣は、社会経済的要因の高さと主観的健康状態に関連していた。		